

# 『私が美波町で感じたもの。』

鳥取大学地域学部地域政策学科 3回生

上遠野 真季

私が美波町を知ったのは、ついこないだ、地域づくりインターン事業の応募用紙を見たときです。それまで、四国には一度しか行ったことがなく、そもそも徳島県すら行ったことがありませんでした。大学で地域の様々なことについて学ぶ中で、このインターンについて知り、必ず行こうと一回生の時から決めていました。

私は兵庫県宝塚市のニュータウンで育ち、祖父母の家も近くにあったので、幼いころから自然の中で遊ぶということは、ほぼありませんでした。小さいころから、地域の人がみんな顔見知りで、仲の良いイメージがあった田舎にはすぐ憧れを抱いていました。そんな私がインターンでこの美波町に行こうと思ったのは、やはり今まで自分がかかわったことのない地域に行きたいという思いが強かったからです。そして、農業や漁業の大変さというものを自分の身を持って感じたいということもありました。



美波町でのインターンでは、日和佐漁協やうみがめマリナクルーズ、道の駅日和佐、うみがめ博物館カレッタ、B&Gでのカヌー教室などさまざまなところに行かせていただき、



貴重な体験をさせていただきました。みなさん、まったく見ず知らずの私を温かく受け入れてくださり、一日という短い体験であったものの道ですれ違ふと必ず声をかけてくださったりと、本当にうれしかったです。

このインターンを終え、私を感じたことは、ふるさとというものでした。この温かい言葉を、私は今まで身近に感じる事ができませんでした。私にとって宝塚市は育ったところ、両親のいる場所であつても、ふるさととは違うなど感じていたのです。自分がどうしてそう思う



のか、自分自身でも全く分かりませんでした。しかし、美波町に来て、美波町で育ったみなさんのお話を聞く中で、その答えが浮かんできました。ふるさとというものは、その土地に根差した思い出が多い地域のことを言うのではないのでしょうか。それは祭りであったり、子どもの頃に遊んだ川であったり、小さいころからかわいがってくれた近所のおばさんであったり、いろいろな思い出があります。それらの思い出がその土地に根差していればいるほど、ふるさと、というものになっていくのだと思います。これを意



識する人というのは、ほんとうにいいでしょう。日常のなかで美波町のことを、ふるさと、と自然に呼べることの素晴らしいさを感じ、そして私も皆さんのように、自分にとつての、ふるさと、を見つけていきたいと強く思います。

今回のインターンでお世話になったみなさん、本当にありがとうございます。私にとってこのインターンは、将来に向けての大きな一歩になりました。私は美波町と、そしてみなさんと出会ってしまいました。これは決して忘れることのできない宝物です。本当にありがとうございます。これからもよろしくお願ひします。